【57】

氏　名（本　籍）	佐藤高明（徳島県）
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第80号
学位授与年月日	昭和56年12月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	後撰和歌集の研究
主　査	筑波大学教授　文学博士　伊藤　博
副　査	筑波大学教授　文学博士　内山知也
副　査	筑波大学教授　桑原博史

論文の要旨

本論文は，後撰和歌集（以下，後撰集と呼ぶ）の撰述組織の考察と隣接諸作品との比較検討を通して，和歌史における，勅撰和歌集としての後撰集の特質を明らかにすることを目的とする。A5版1001頁。序論と本論とから成る。

序論では，まずその第1章において，従来の研究が後撰集について，

(1) 未定稿の歌集

(2) 権門の政治力に支配された歌集

(3) 物語風の歌集

と見てきたことを紹介して自説のあらましを述べる。すなわち，(1)(2)は先行する古今集のみを勅撰集の本来の姿と見る態度に基づくもので，源順ら後撰集撰者の立場を無視した謬見にすぎないとし，(3)は妥当な見解と認められるものの，古今集とはまったく質の異なるこのような特性の生じた原因を，後撰集の依拠した資料が女房社会の歌語りにあった点だけに求める一般の考えは常識論にすぎず，他に，「散佚歌物語集」ともいうべき資料に拠った点を重く見るべきだとする。

ついで第2章では，万葉末期から後撰集成立ころまでの和歌史の概略を論じ，万葉集の及ぼした影響，詞書と和歌との連帯に興趣を覚える風の誕生，歌人としては当時無名であった人々が後撰集の編者に撰ばれた情況，歌壇の大御所紀貫之の足跡等の追究によって，後撰集が歌物語の性格を強く含み持つ独自な歌集として生まれた由来を明らかにしている。

本論は，序論の立証にもっぱら筆を注ぎ，下のように構成されている。

第１部　後撰和歌集の撰述組織に関する批判的研究

第１篇　後撰和歌集の問題点についての考案

第２篇　後撰和歌集の部立編成に関する批判的考察

第３篇　後撰和歌集の歌人採択に関する批判的考察

第４篇　後撰和歌集撰者の主題配列に関する批判的考察

第２部　後撰和歌集と隣接諸作品との比較に関する研究

第１篇　各論研究篇

第２篇　総合的結論篇

第１部第１篇では，後撰集に序文がないこと，その組織が単純であること，撰者自身の歌がないこと，恋歌・贈答歌が目立つこと，詞書が長大で物語風になっていること，権門歌人の歌，とくに恋歌が多いこと，当代代表歌人の歌が少ないこと等々，古今集と相違する後撰集の様態を明らかにし，その根本理由を論じている。古今撰者への競争意識を持ちながらも，後撰撰者たちが撰集当時，歌人としての実績には恵まれていなかったらしいことなどが，著名な人々の歌に関心を向ける物語風の歌集を導くことになったと言う。そして，その編纂には，後撰集撰集と同時に開始を命ぜられた古点事業によって知りえた多彩で新鮮な古代歌集，万葉集の影響が大きく及んでおり，後撰集が一見錯雑した形態を見せるのはそのためで，未定稿の故ではないと言う。こうして，後撰集は撰者たちの文学者としての自主性によって編まれた歌集であったとし，さらに，「散佚歌物語集」の発生と展開に論を移し，後撰集にこの歌物語集との深いかかわりがあることを証明した上で，撰者たちに自らを頼む態度があったと述べている。

第２篇では，古今集に見られる歌合歌，屏風歌，物名歌が後撰集になく，組織が単純になっていること，長大で物語めいた傾向を持つ詞書の中にも古今集の詞書の在りかたと通う面もあることの理由を論じている。後撰集はあくまで，古今集を意識する勅撰和歌集として編まれたもので，古今集に対立しうる歌集としての体裁の中に物語の性格を呼びこんだ歌集であることがその因であるとし，後撰集を歌物語そのもののように見ることは，後撰集の本質を損うことになると言う。ただし，撰集を命じた村上天皇はその物語ぶりの過剰に満足しなかったので，撰者たちは第２次撰に入ったのだが，第２次撰が成るころ天皇が病床に臥し，やがて崩御に及んだことにより，後撰集は序文を欠く運命を持つに至ったとも論じている。

第３篇では，撰者が歌の作者を撰ぶにあたって採った方策に論題を転じている。後撰集においては，筆頭撰者の源順が源氏出身であるため，源氏系の歌人が圧倒する数を占め，源氏系以外の氏族にあっては，源氏系歌人と姻戚・交友の関係にある人，撰者の父祖や撰者との交友関係の深い者が撰ばれている事実を指摘し，後撰集が權門の政治力に支配された歌集ではないことを考証している。また，撰者たちが後撰集撰集後，それぞれ個性豊かな歌人として活躍したことを論証し，撰者の歌が欠落していることを根拠に權門の圧力があったことや撰者に作歌技倆がなかったことをいうのは妥当でないとしている。

第４篇では，後撰集全20巻の主題の配列について考察し，本論を納める。古今集と異なり，後撰

集の主題が詞書をも重視すべき状態になっていることに着目し，たとえば，「恋歌」の部にあっては，一見いかにも無造作に見えながら，その実，各歌々は特定の語句によって接続する歌集らしい配列になっていること，そして部分部分において，数首または20首程度を一歌群としつつ物語の筋を推定できるような配列になっていることを追究し，後撰集の創造力の高さを明らかにしている。

第2部では，まず第1篇において，隣接諸作品との比較を通して後撰集の資料依拠の実情に観察を向け，後撰集が「散佚歌物語集」との密接な関連を有するとする筆者の持論の証明に努めている。すなわち，後撰集と後撰集時代に生まれたといわれる伊勢物語・大和物語とのあいだには，資料の上で親子の関係はないこと，また，当代の私家集からは種々資料を仰いでいると認められるものの，それに拠らない部分も多いことを論じ，「散佚歌物語集」にも依拠する面が少なくなかったことを明らかにしている。

第2篇では，以上さまざまな角度から考察してきた後撰集の成立について，古今集との比較，諸記録の様相等を通じて考察し，第1次成立を天暦7年(953)10月ころ，第2次成立を康保3年(966)ころと推定，隣接諸文献との比較や時代思潮との関連等による第2部の考察はもとより，本研究全体の考察とのあいだに食い違いのないことを指摘した上で，これまでの論述をまとめている。

審　査　の　要　旨

第2勅撰和歌集である後撰集について言及した人は，古来枚挙にいとまがない。しかし，後撰集そのものを研究対象の中心に据え，後撰集の立場から関連する諸作品を見ることでその本質を見極めようとする考察は意外に少ない。第1勅撰集である古今集，同時代の歌物語である伊勢物語や大和物語，30数年後に現われる源氏物語等の世界を究明するための補助資料，関連作品として扱われる傾向があったことは否めない。といって古今集を継ぎ，伊勢・大和物語に並び，そして源氏物語の前夜に位置する後撰集が文学史上きわめて重要な存在意義を有することはいうまでもない。戦後はこの意義がとくに注目され，松田武夫，小松茂美，岸上慎二，藤岡忠美，奥村恒哉，片桐洋一の諸家を中心に，後撰集の研究は急激な進展を見せるに至った。著者はこの一翼を大きく担いながら，後撰集を後撰集として考察した数少ない学徒で，その多年の研究が本論文に集成された。その成果は，見てきたとおり，後撰集研究史上に屹立するものと評価することができる。

古典を研究するにはさまざまな姿勢がある。が，大きく分けるならば，それは次の3つにまとめることができよう。(イ)博引旁証により，本文の訓みや意味を決定する姿勢，(ロ)研究主体の現代的な問題意識や他国の新しい研究方法等を基準にして，対象を自由に切り取っていく姿勢，(ハ)作品の生れた場に，研究主体も作り手・受け手として仲間入りすることで，古い作り手・受け手と立場を共にしようとする姿勢，この3つである。方法論を言挙げしているわけではないけれども，本論文は，(ロ)の姿勢を極力避けるように努め，伝統の姿勢である(イ)を尊重しながら(ハ)の姿勢を貫くことを常に意識し，それを実践している。これは貴重なことで，そのため，本論文は，従来の研究が見のがし

ていた，後撰集に関するさまざまな特質を照らし出すことができた。たとえば，後撰集の撰者に文学者としての自主性が強く存在したこと，後撰集があくまで歌集として編輯された物語風の歌集であること，雑纂のように見えながら独特の配列方法を貫いていること，その後散佚に及んだ当代の歌物語集を重要な資料としたらしいこと，伊勢・大和物語等と親子の関係にあるものではないこと等々は，大部分，本論文によってはじめて確認された成果であるといえるのであり，これによって，後撰集が和歌文学の上に新たな世界を切り開いて立つ独自な勅撰歌集であることを明らかにした功績は，高く評価される。

むろん，疑わしい論述もある。後撰集が創造に富む歌集として形成されるについて，著者は万葉集の落した影を重視している。論自体は認められる。だが，源順たちが訓んだ万葉歌は短歌だけに限られ，その訓も今日といちじるしく違っている。後撰集に関しては順たちの立場に帰ろうとした著者が，万葉集に関しては順たちの依拠した万葉集を考慮しなかったのは惜しまれる。著者は，後撰集の第1次本の成立を天暦7年(953)10月ころとしているが，天暦7年は万葉集の訓読作業が始まってわずか2年目である。第1次本と万葉集との関係はどう見るべきなのか，その間の掘り下げを等閑視した点にも不満が残る。また，勅撰集である後撰集に，撰者と縁の深い人々の歌が好んで収録されるようなことがなぜ許されたのか，不審が残されている。論述の上に重複，繰り返しが目立つのは，大部の著作に共通する傾向ではあるけれども，反省を要するであろう。

しかしながら，これらは瑕瑾ともいうべきもので，本論文の成果の根本にかかわることではない。私家業と後撰集の関係など，当代私家業の数種に及んだものの，なお多くの資料を余している。王朝の歌集・物語の研究にとって私家集の考察は最も重要である。この点に関しては著者も自覚しており，引き続き，「後撰和歌集の研究，私家集研究篇」を公表することを約束している。私家集研究篇を伴うことによって，著者の着実な研究はさらに雄大な構想の中でいっそう充実していくことが期待される。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。